

問一

人が「都市」に住まうことを、旧来の束縛からの解放や洗練された生活の享受であると、表面的に理解すること。
（解答欄 2 行）

問二

都市化は、人間が暮らしやすくするために人工的な構造物で自然の荒々しさを和らげると同時に、そうすることで人と自然との濃密な関わりを希薄にしまったということ。
（解答欄 3 行）

問三

自然との関わりを保って生活することではじめて、人は人類と自然とのあいだに長い歴史を通じて培われてきた自らの存在の確かさを実感して生きることができるといふこと。
（解答欄 3 行）

問四

他者の存在を無化し、人を人とみなさないような人々のあいだで生きることが自らの心を失うことに等しく、心のありようを表情に表し出す人々のあいだで生きて、互いが人として存在していると認め合うことが大切だと考えている。
（解答欄 4 行）

問五

都市化は旧弊からの解放自由であると了解されがちだが、その実態は、人間を自然から離反させその本来の存在のありようを見失わせるだけでなく、他の人をも遠ざけてしまっている。人から心の豊かさを奪ってしまうものだと考えている。
（解答欄 4 行）

問一

読書とは各々が熱狂もなしに作品と向きあう孤独な営みだが、世界の至る所で絶え間なく本は読まれている以上、読書で静かな情動を抱く人々が世界に遍在しているということ。

（解答欄 3 行）

問二

物語に描かれた者は、既存の倫理の序列を越えた、ありのままの人間関係のありようを訴えかけてくるということ。

（解答欄 2 行）

問三

物語を読むのはその効用からではなく、読む行為そのもののなかに現状への抗いや、内容には還元されない楽しさがあるからであり、物語の効用の存在を前提とした質問に安易に答えることは、そうした機微を見失わせてしまうから。

（解答欄 4 行）

問四

戦争経験自体から言葉の持つ力を直感的に洞察することなく、戦争に対して文学や言葉は無力かを観念的に問う態度は、戦争を傍観者の眺める立場に恵まれた者が、自らの倫理的優位を誇示する思い上がり裏打ちされているということ。

（解答欄 4 行）

問五

言葉や文学が人間に与える希望は、戦争の阻止という効用や傍観者のな思考にではなく、現状に抵抗する姿勢のなかで、実を結ばぬにせよ、新たな生命や現実を自分の意志で育み、未来に届けようとする行為自体に由来するということ。

（解答欄 4 行）

問一

その上あなた様まで陸奥にお連れしてつらい目にあわせ申し上げるような事は、お気の毒に思い申し上げますので、義経めが先に下って、もし私が生き長らえておりますならば、秋の頃には必ずお迎えを差し上げるつもりです。

（解答欄 4 行）

問二

人の命は無常で死には抗えないので、義経が陸奥に下った後、北の方が死んだら、義経は北の方を連れて行かなかったことを悔やんでも悔やみきれないだろうということ。

（解答欄 3 行）

問三

以前西海に逃れる時には北の方を連れて行ったのに、今回陸奥に連れて行かないのは、義経の北の方への愛情が早くもさめたからで、それを北の方が恨んでいるということ。

（解答欄 3 行）

問四

義経は強情で、北の方が妊娠や頼朝に捕まる可能性を理由に連れて行けと頼んでも、どうにもなるまいということ。

（解答欄 2 行）

問五

薄情な義経様に見捨てられてつらい思いをするのならば、私も義経様を思う心が変わってほしいよ。どうしてこんなにも私につれない義経様を恋しく思っているのだろうか。

（解答欄 3 行）